

広島の後復興における建築活動―

地域の建築家の設計活動を通して（後）

語り人：錦織亮雄（新広島設計）

語る会コーディネーター・編集執筆：石丸紀興

（広島諸事・地域再生研究所）

第三部 錦織亮雄さんの語りによる広島のことと錦織亮雄の建築活動

はじめに

平成二四（二〇一三）年十二月、広島の後復興を建築という分野から振り返ろうという目的で、広島で「時代を語り建築を語る会」を開催し、まずその第一人者といえる錦織亮雄さんを招いて、可能な限り戦後の広島について語っていただいた。

当初この「第一回 時代を語り建築を語る会」（以下「語る会」という。）の内容を「広島市公文書館紀要第26号」（平成二五年六月発行）にまとめることとしていたが、全体が膨大なボリュームとなり、前・後編として分けざるをえなくなった。紀要26号では前編のみ記載したため、本号において後編とし「語る会」の後半分をつなげるのであるが、後半をまとめるにあたり、もう一度全体を見直してみ、補足的な内容、あるいは確かめたいところが出てきたので、平成二六（二〇一四）年四月三日に錦織さんからの聞き取りを実施した。本稿は追加部分を含めて全体を再編成して編集したものである。

なお、全体を三部構成としたことについてはすでにふれたが、⁽¹⁾ 紀要26号においては、第一部として戦後復興における建築活動の解説、第二部として「語る会」で得られた情報を基にした特に河内義就の建築活動について論述した。

河内義就さんについて追加のこと

コーディネーター石丸紀興（以下コーディネーターと略） まず河内事務所とのつながりを踏まえておきますと、どうなりますか。

錦織さん 大学を出て大阪に就職していたのですが、親父が亡くなったりして、諸事情があつて広島に帰ってきて、河内事務所に千日だけいさせてくださいと生意気なことを言つて昭和三六（一九六一）年⁽²⁾に入所するのです。

コーディネーター 当時は河内事務所はどんな状況でしたか。

錦織さん 河内設計は一階にアトリエがあつて、大きな製図板を置いていて、河内さんが本を置いたりしてそこにいたんです。二階に何人も設計者がいて、部屋も増築したりして、多いときは六〇人ぐらいいたんじゃないですか。大学を卒業して入所したのは私ぐらいで、図面書いたりする人は工業専門学校なんかをスピーディに出ていたんですね。そして設計者と河内さんとの間に、大陸帰りの松島（泰）さんや上野（勇）さんなどのベテランがいたんです。この人たちは現場での監理が主な仕事でしたが、監理といつても半分遊んでいたような感じで、河内さんがベテランを周りに子飼いにしていたような感じでした。それでみんなたむろして、わいわい言つていたのです。

コーディネーター 六〇人ですか。すごいですね。

錦織さん 一階と二階で雰囲気は違つていて、私は一階で自分のスペースを作れといわれて、河内さんの隣にいたのです。

当時広島に設計事務所が六、七軒ぐらいあり、建築家協会というのが昭和二三（一九四八）年頃からあつて、週一回ぐらい集まるんですが、その集まりを河内事務所がよくやったのです。それが後から建築事務所協会のようなものになつたりしたんですが、そのとき僕は河内さんのセクレタリーみたいな感じの役割を果たしていたのです。

コーディネーター 錦織さんと他の事務所の建築家とのつながりはどうですか。

錦織さん 河内事務所の応接室で建築家協会の会議があるんです。そのときみんな来るんですが、僕が話し相手をしてたんです。和田（保）さんが、村田設計から独立して挨拶に来るとか、奥田実さんが当時竹中（工務店）にいて時々遊びに来たりもしました。暁設計からのつながりというと、大旗（正二）さん、

村田正さん、河内義就さんですが、村田さんはどちらかといえば本人自認の営業マンでしたね。

コーディネーター 確かに、東大の高山英華先生が広島に来られたときなど、ほとんど村田さんが相手をしていたというのを聞いたことがあります。瀬戸内海に釣りをしに行ったりして、接待していたとか。

錦織さん 確かに、村田さんは営業マンで河内さんは営業は下手でしたね。すぐ怒るしね。お役所なんかに行っても煙たがられていましたよ。

コーディネーター ちょっと前回聞き逃したことからお願いします。昭和二四（一九四九）年に実施された広島平和記念公園コンペに広島から二人入選者があったのですが、河内義就さんと藤本次郎さんだったわけですが、この藤本さんという方の情報はなにか残っていませんか。

錦織さん よく知りません。ほとんど知られていない方です。

コーディネーター 河内さんはどんな案を出されたか聞かれたことはないですか。

錦織さん 聞いてないですね。河内さんはカトリックの記念聖堂（世界平和記念聖堂）のコンペにも設計案を出されてますよね。

コーディネーター 佳作で入選されてますね。河内さんはスケッチしたり、図面を書いたりするのが好きだったようですね。

錦織さん 根っからの建築家ですね。横浜高等工業学校の中村順平先生による教育のためものですよ。

錦織さんの建築家としての出発

コーディネーター すでに何か所か錦織さんご自身のことを述べておられますが、改めて錦織さん自身の



写真1 森本邸外観

ことについてお尋ねします。

錦織さん これは私の処女作（写真1）なんですけど、事務所を開いたときに、広島相互銀行、今のもみじ銀行の創立者で森本亭さんという、なかなか偉い人がいらつしゃって、その人のご自宅が古江にありますけど、もう売ってしまったので、近々に壊すんですけどもその設計をしました。昭和四一（一九六六）年頃、森本亭さんが、田中清さんとか、大成建設だとか、いろんなところの施工業者も含めて、自分の家のデザインコンペみたいなものをされて、私も設計案を出しました。蔵が欲しいというので、蔵付きの家だったんですが、皆さんは蔵を家の横に付けたんです。僕は、家の真ん中に蔵があつて、蔵の周りに家がくっついてるといふのを出しました。蔵に入口が二つあつて、何でもいらぬものはすぐ蔵に納められるみたいな構成を森本さんが気に入って、私がやることになったんです。

広島そのときの雰囲気を示すための話を一つします。この案がいいということを決められて、初めて僕は森本亭さんと会ったんですが、そのときに、いろいろ打ち合わせをして帰りました。森本さんは僕と初めて会ったときに、私は二〇代ですから、すごく不安を感じて、家を設計するのにいいからと思つて私の案を選んだら、若造が来て、こんな若い者に自分の一生の家、設計させたら、大変なことになるといふ不安を感じたんだそうですよ。後で、ご本人から聞いた話です。それで、当時、マツダの松田恒次さん、要は削岩機屋さんだったか、ボタンコ屋さんだったか、そういう地方の会社を、世界に出ていく自動車会社にした人ですよ。その人が、森本さんの友達だったんです。森本さんが、「家を建てようと思つて、設計を頼んで、いいと思つて選んだら、ものすごい若造の設計なんだが、それでいいだろうか」と松田恒次さんに訊いてみたら、「新しいものを作るときは若い者がやった方がいいにきまつると」と言われたそうで、そ



写真2 森本邸玄関付近の内部写真

れで、森本さんが僕に、「そういう質問をして、わしは一本取られた、大恥をかいた」と言っていました。つまり、今から世界に飛び出していこうというマツダの覇気みたいなものが、たぶん恒次さんにあっただと思います。広島その当時の時代というものが、僕は昭和四五（一九七〇）年ぐらいから少し様子が変わってきたと思いますが、東洋工業がマツダになったのもすごいと思うけれども、そういう雰囲気ですごくあつたと思います。

でも、ごくごく普通の和風の住宅なんですけれども、これはもう、何十年も経つてからの写真です。これは、玄関の写真（写真2）です。玄関の戸の外にこんな余分の垣根があるんですが、それは当時、森本亨さんが広島県の教育長、教育委員長かなんかだったんですが、広島が教育問題で、すごく荒れていました。それで、日教組の人たちが押し寄せてくるというんで、今考えたら大したセキュリティじゃないですが、ついでに余分にもう一つ格子を付けて欲しいということでもやりました。

河内事務所をやめる頃の設計の仕事

コーディネーター 河内事務所をやめられる頃はどんな仕事をしていましたか。

錦織さん 広島工大（広島工業大学）、博多タワー、鏡ヶ成の国民休暇村などです。東京事務所をつくって留守番で行けということ、たびたび東京に行ったり来たりしていました。前回お話しした宮浜温泉の石庭も東京事務所を担当してやりました。そのうち千日になったので昭和四〇（一九六五）年に河内事務所は辞めて東京で働き始めました。東京では大きな企業グループの下で地域開発のための第三セクターの設立準備メンバーとして働くかわら、友達と一緒に小さな設計事務所をやっていましたが、自分の方向が決まらず半分遊んでいました。そのうち、河内さんから、県立美術館を広島的设计事務所が協同でやることになったので、私に河内事務所の代表でやってほしいと頼まれて参加しました。佐藤重夫先生がキーマンで、村田大旗事務所や白土事務所などからそれぞれ出てきてみんなでプランニングをしました。県庁からは田淵さんがいて、その下に天満さんがサブのチーフのような形で出てきました。後に広島工大の先生になった人です。小講堂は僕の担当でした。こうして美術館の設計は進み、

東京や広島を行ったり来たりしていたんですが、広島工大の鶴さんが広島工大でも教えてくれということになり、工大にも行き始めました。

コーディネーター そして次第に独立の形になっていったのですか。

錦織さん いや明確な形でなく、八、九年間ぐらいは河内設計事務所千田町分室都市建築研究所という、河内設計の分室みたいな役割を果たしていたので。都市建築研究所というのが私の事務所の名前です。昭和四一年頃にやった一番最初の仕事は、今はもうありませんけれども、せとうち苑です。建築のつくりかたの問題ですけれども、当時、河内さんと一緒に、都市計画だとか、地域計画なんかもいろいろしてましたし、それで、当時、日本中で、まだまだ建築で都市や国を構成するような感じのことがあって、この建物もそうです。それからしばらくは私はずっとシンメトリーのものをつくっていました。シンメトリーというのは、大自然の原則みたいなところがありますよね。木の葉っぱから、虫から何から、ほとんどシンメトリーです。人間のつくったもので少し美的にシンメトリーがくずれたものもありますけれども、シンメトリーを中心に建築の計画をして（写真3）、必然的にそれなりにちゃんとしたものであるだろうというふうに信じてましたから、ずっとそれでやりました。

コーディネーター せとうち苑は設立された都市建築設計事務所の設計という形ですか。

錦織さん いえ、河内設計事務所として担当していたのですが、河内さんはほとんど関与されず、私に任せられたのです。それで、最終的には私の事務所でやったということになりました。



写真3 せとうち苑の階段室等の外観

錦織さんの都市建築研究所の活動として

コーディネーター それではせとうち苑はシンメトリーということ以外にどのような特徴がありますか。

錦織さん これには力を入れてやりました。敷地の中心に正面玄関が有り、前庭の中心に避難階段を配してそれを建物の象徴のようにしております。

「せとうち苑」というのは正式名称が公立学校共済組合広島宿泊所という宿泊施設で、教職員組合の厚生施設です。結婚式場や宿泊施設がありますけども、最初にプランニングしたときに宿泊施設ということなので、宿泊室にバスルームをつけて、東京に持って行きました。すごく叱られて、「これは宿泊施設じゃありません、厚生施設です」って言われて、風呂は共同風呂だということな時代だったということですね。それから、厚生施設としてつくったものだから、いろんなところで不自由がいっぱい出てきたと思います。

これ(写真4)は庭ですが、7つの川を象徴するというので、水が流れる道をいっぱい造ってたんですね。これ(図1)が配置図で、庭園部分の大きさがわかるでしょう。この辺に彫刻物というには、あまりにも簡単な石ころがありますけれども、これは空充秋君の作品です。実は先ほどもちよつと言いました、県立美術館の玄関まわりの石組みも空充秋君の作です。そうそう、エピソードを紹介すると、ちよつと県立美術館の実施設設計をするときに、予算がないから、外部に貼る石を、ぜんぶ擬石にしようということに県の方でなつたんです。ちよつと僕が森本さんの家を設計している頃で、森本さんのところで打ち合わせをしたときに、「美術館に貼る石を擬石にするんですよ」と言ったところ、「擬石って何ですか」とおっしゃるから、「あの広島銀行みたいなやつですよ」と説明しました。森本さんはすぐ車を飛ばして、広島銀行の外装を見に行ってくれました。



写真4 せとうち苑の外構・前庭付近

それで、「あれはよくない」ということになって、県庁へ電話をしました。尤もあの当時は、美術館も二葉会が寄付して、公会堂にしても市民球場にしても美術館にしても、広島財界が寄付してつくることがあったんです。森本さんは財界の中心人物ですから、すぐ県へ電話をしてくれて、鶴の一声で本当の石になりました。それで、本当の石になったからというので、空充秋君に頼んで、庵治へ行つて、庵治石を持ってきて、構成したというふうなことがありました。その空充秋君が彫刻と、彫刻のような彫刻でないようなものを配置してくれているのが、このせとうち苑の庭です。

街に対して開かれた配置にしていますが、都市の計画や、町をつくるということに関連して建築をつくることは、先ほどの広島湾淡水化計画^⑧なんかも含めて、河内さんの大きな構想を手伝っていましたからその影響を受けているかも知れません。

そのほかの設計事例

コーディネーター そのほか大きな設計の仕事はなんでしょうか。

錦織さん 横川のスカイプラザ(平成元(一九八九)年竣工)を安井設計さんと協同でやりました。これは西区民文化センターと図書館と住宅とを組み合わせていて、私のところでは住宅部分を主にやりました。珍しい複合建築です(写真5)。

コーディネーター 昭和五六



写真5 西区民文化センター・図書館・住宅の複合体

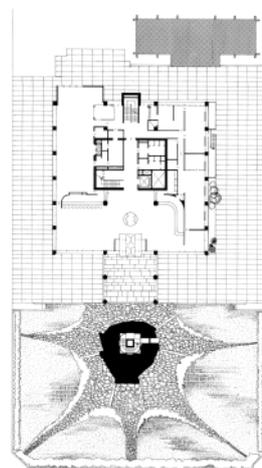


図1 せとうち苑の配置図

(一九八二)年竣工の広島県立身体障害者リハビリテーションセンターは河内事務所と協同の作品です(写真6)。

錦織さん その前段として、私がリーダーをして、広島県設計連合で障害者施設全体の基本計画をやりました。広島島の若い設計者を集結して共同作業をやりました。その上で東京に委員会をつくって検討しながら計画を進めるというやりかたでした。

コーディネーター そのほか多くの設計に関係されていますね。⁽⁴⁾全部お聞きすることはできませんが。

建築家とその作品という捉え方

コーディネーター 少し話題を変えて丹下(健三)さんや村野(藤吾)さんのことについてはどういうように捉えておられますか。

錦織さん 河内さんとは丹下さんの話も、村野さんの話も、たくさんしました。河内さんは、わしは大衆文学者だからと、いつも言っていました。丹下さんのことは純文学者だと言っていました。建築を構想するとき、いつも「丹下なれどするだろうか」と言っていたから、ずっと意識にあっただと思いますよ。同年代でしたし。河内さんは村野さんのことは大変尊敬していましたね。私はこの両巨頭の構想力や意匠力には敬意を表しますが、広い意味で言うモダニズムの、要は、人の目を引く進歩だとか、新しさだとかいうようなものを至上とするところや作品主義には懐疑的でしたから、その意味では河内さんの大衆文学論には興味がありました。建築を作品と呼び始めたのはいつからかよくわかりませんがね。

コーディネーター 建築における作品主義・純文学大衆文学論ですか。

錦織さん 作品と称される、進歩、新奇の産物で建築の歴史を語ってはいけないというふうには、ずっと思っているんです。今日の話は、この五〇年の間に、



写真6 広島県立障害者リハビリテーションセンター

私がどんな仕事をして来たかということですが、銀行から商業施設、住宅に至るまでたくさんの仕事をしてきました。それは作品としてリストにも何も載りませんけれども、それぞれの状況の中で完成度を追求してきました。町は作品と呼ばれない仕事でほとんどできています、ところどころに、作品ということで、雑誌に載ったりしたものがあるけれど、それは問題ではなくて、全体を支えている建築で、人の生き方や、都市の姿や、その時代とかは語られるべきだというふうには思っています。石丸先生の暁設計の作品を細かく分析すること、もつともつと細かく分析したら、にじみ出てくるような町づくりの話があるかもしれません。僕は作品で建築の歴史をつなぐということについては、疑問を持っていますが、ただ、方法がないんですね。つまり、作品以外でやる方法が確立されていないというような感じがちょっとしてますね。

コーディネーター そのあたりに関連して独特のお考えをお持ちなのですね。

オイルショック前後のこと

コーディネーター ところで戦後全体の時代把握についてはどうですか。

錦織さん 少し時代が飛びますけれども、昭和四三(一九六八)年に、五月革命だとか、文化大革命だとかがあつて、磯崎さんに言わせると大文字の時代は終わったというふうなことがあつて、ちょこちょこしたことになりますけれども、昭和四〇年代には、実はボーリング場のブームがあつたんですね。それは私は仕事だからということで、ボーリング場を十二件、設計しました。今は、ほとんど存在してないんですね。ボーリング場っていうのはファンクションがすごく簡単なんで、どっちかという好きなようにできるといふ、割とのびとデザインできるようなことがありました。

そういうふうなことがあつて昭和四〇年代を過ぎて、年表の昭和四七(一九七二)年にローマクラブの「成長の限界」というふうには書いていますけれども、昭和四八(一九七三)年に世界中が衝撃を受けたオイルショックというのがありました。要は、地球の限界を感じるようなできごとがあつたんですね。昭和四五年を中心にした全共闘なんかのこともありましたけれども、それまでのパラダイムを、一種の国家管理のパラダイムと言つてもいいけれども、そういうふうなものを引き崩すというか考え直すという時代が、昭和四五年前後にあつて、

その後、すぐオイルショックがあります。

コーディネーター オイルショックをどのように捉えておられますか。

錦織さん 私は、オイルショックがあった昭和四八年ごろから、外国で仕事をすることを少し始めまして、最初はイランに行きました。イランと日本は割と仲がよかったです。パーレビ王朝のときのイランに行つて、気持ちとしては、オイルショックのオイルの金を取り戻せというふうな気持ちだったんです。イランに行つて、一番最初は、パーレビ王朝がつくる憲兵隊の家族の団地の計画をしました。「敷地はどこですか。敷地の図面を下さい」と最初に言つたら、笑われて、「敷地はその辺です。どこでもいいです」と言つたんです。砂漠の中に憲兵隊の家族を人質に取るための団地の計画をしました。まあ、パーレビ王朝がすぐだめになりましたから実現しませんでしたけれども、そういうようなことをやったり、それから、中近東で仕事を始めることがあつて、その後、私の事務所の都市建築研究所は、中近東のクウェートのハウジングセンター、ハウジング・オーソリティーの仕事をやりましたから、クウェートのハウジングをするために、常に、二人ずつ、人員を派遣するということをやりました。

仕事はそんな感じなんです。問題はですね、昭和三九（一九六四）年に新幹線が開業して、昭和四五年ぐらいから、急に日本が小さくなつちやつたんです。それで、大文字の時代は終わったとか、何の時代が終わつたとか言うわけですが、この頃で広島復興の時代は終わったのかもしれない。その後は少し様子が違うんですが、設計のほうのことです。中央の設計事務所が広島にどつと押し寄せてくるのが始つたのは昭和四五年です。山下設計ですかね、広島市立中央図書館、映像文化ライブラリーとかをつくりました。そのときに広島では、設計技術センターという設計者の協同組合をつくりました。河内さんと一緒に私は白島の喫茶店で、その規約を一生懸命二人で考えた記憶がありますけれども、この頃はまだまだみんなで一緒になつてやろうというふうな気分がありました。

時代への警鐘、更にバブル時代へ

錦織さん その後は、だんだん閉塞感のきついで時代になつていきました。国民は受注者と発注者の関係になつてしまい、ものを言つたらいかん、みたいな

感じになつてしまいました。さっきの藤本初夫⁽⁵⁾さんところへ夜行くと、広島県の原田睦さんがアルバイト仕事をしていたような時代は終わつてしまつて、あいまいな責任を厳密にしようということでも形式化が進み、本当の責任は誰にも取れなくなつていくような感じがします。戦後復興期は「あいまいな責任」の時代でした。余談ですが、東北の、復興にも「あいまいな責任」方式が大切だと思います。それを前提に広島がやつたような、最初にわけもわからない状態のときに、わけもわからないメタフィジカルのことをいろいろやつたりすることから始まるほうがいいなあというように痛感しています。

コーディネーター はい。時代への警鐘もいただきましたけど、ちよつと先ほど出ました、建築分野で、あるいは都市分野で、バブル時代は何を残したか、あるいは、バブル時代の功罪つていうようなことです。こういうことについては広島に限つたことではない、日本全体の問題でもあるんですけど、また改めて、シンポジウムか、どなたか適当な方にお話しただくか、またそういうテーマでやつてみたいなと思つています。復興から高度経済成長といえますか、そういったものから、時代が行き詰まつていくというようなこと、さらに現在では経済的に非常に行き詰まつてしまつておりますけども、そういう時代を通して、建築の果たす役割といったことについて、あまり収斂しなくてもいいと思うんですけど、いろいろみんなと議論する機会を設けていければいいかなと思つています。

錦織さん また改めてやりましょう。

錦織さんの方法論の問題

コーディネーター 錦織さんの建築あるいは設計の一貫した方法論がございましたらお話してください。

錦織さん 作品ではなくアノニマスな完成度の高い建物をつくるためのシステムの的なアプローチです。いくつかのフレームを考え、徹底してチェックリストを作成し、アクションの流れを整理し、システムを完成させるのです（資料1 新広島設計T.S.(S.T.S) 全体像参照）。フレームは全てで5つ考えられていて各フレームはさらにそれぞれ小テーマがあり、所内の担当者がいてシステム作りと維持の実行と管理の責任者・担当者が決められている。最も簡単と

いえるようなコミュニケーション分野のフレームを示すと、図(資料1の「CのFLAME」部分)のようになっていきます。マネージのフレームやプロジェクトのフレームなどは複雑、難解で、取り組み方もかなりの知恵と労力を要することが予想されます。

コーディネーター おもてに出てくる設計家の裏側にこのような考え方の方法論が用意されていたのですね。ありがとうございます。問題はこのようなフレームごとにシステムごとに取り組んだとき、はたしてどのような成果が得られるのか、ということでしょうね。一見複雑で難解で、凝りすぎのように見えるシステムのアプローチは、それをこなせば恐らく高い合格点を得ることができるとでしょう。一方、このような方法論になじまない建築や設計方法論も存在することは確実です。これはどちらがよいという問題ではありませんが、それぞれ結果に対する評価を比較し、その良さと問題点を明らかにしつつ、方法論の有効性をそれなりに判断していくことが必要でしょうね。アトリエ派でそれなりのおもしろい案が出て来るというとき、また一方ではあまりに問題が散見されるとき、方法と成果・結果とが一筋縄に行かないときに、我々もまた一筋縄でない評価の構造を構築しなければならないといえます。以上は、私なりのコメントです。

質疑応答・討論

コーディネーター それではこのあたりでちょっと質問の時間を取りたいと思います。ご意見・ご質問がありましたら、お願ひしたいと思います。

発言A 突然ですが、今日は丹羽先生の追悼ということ、僕は丹羽先生とは一緒に仕事をさせていたんで、丹羽先生が非常に熱心に、建築のことをおやりになっていた感じの、そのリアリティが残っているんですけど、今日は、錦織さん、よく最近は一緒ですね、いろんなお仕事をさせていたでているんですが、初めてきちつと、錦織さんの戦後のことをお聞きしました。広島で活動されている方々はリアリティとしてそれがなくもしいたので、僕は東京へ行ったり来たりしてるものから、実は広島は建築都市として、今非常に、注目をされています。一つは何らかの魅力的な建築が生まれている

ような、そういう印象があるんですね。

建設量そのものは、東京は巨大な量があるんですけども、非常に厳しい資本主義は建築を蒸発させてしまうのではないかと気が僕はしています。つまり、建築がつかれない、建物ができて建築がつかれない、空間ができて家がなない、というような、そういう状況を彼らは非常に敏感に感じていて、どこかで建築というものができている場所がある、それはどうも地方に今あるのではないかと。そういう意味では、非常に鋭敏な建築が発生していくことこの場所と状況と、その建築そのものが何かというメタフィジカルの問題ですけども、広島は何らかの魅力があるということを僕自身も感じます。私の友人で、以前『新建築』の編集長をしていた寺松君という、今はフリーの編集者なんですけれども、彼は非常に有能な人で、実は新建築の編集長をやったときに、*„V.I.“* という英語版の、年4回しか出ないんだけど、そっちのほうが売れちゃって、本誌が売れなくなっちゃったっていう、自分で自分の首絞めた状況になって、仕事をしすぎて、少し離れられたんですが、また新建築の顧問におなりになりました。実は最近、できれば広島現代美術館に建築部門を作っていた方がいいと非常に思っています。

特に広島のこと、作品主義のこと

発言Aの続き 現代建築の部門を。広島今の一番の弱点は、建築のメディアを持ってないことなんです。だから全部のメディアを中央経由でしか、建築のことを言えないというのは、僕は非常に都市文化として、広島がまだこれから獲得しないといけない大きなことだというふうに思っていて、建築の関係の方には協力していただきたいと思えます。寺松君とはそんなような関係で、彼も、今までの既存メディアではない、そういう建築の広報の仕方をグローバルレベルでやりたいと思ってるということです。実は彼は今、企画で、都市と建築のことを新建築社でやりたいというんです。広島を取り上げたい。僕は京都とかいうとね、違うんですよ。もう、アムステルダムとか、ロンドンとか、ニューヨークとか広島をやりたいと、彼はそういうレベルで広島のことを見ているということなんです。そういう見方でみるときに、錦織さんに、戦後のことを、まだまだお聞きしたいというふうに思いました。

もうひとつは、さつき錦織さんから七〇年代に国家が主導することが終わった、という話でした。その後で、実は非常に急激な思考の変換があつて、国家の後、すぐ個人になつてゐる状況があるんですね。そのあと我々は、協同して何かを考えていくとか、つまり場所の問題として、なにか自分たちの文化を考へるつていうことにたどりつかないまま、東京の巨大なメディアが、おいしい生活という言葉があるというふうな、攻撃をしてきた、その消費社会の中に引きずり込まれたんですよ。少し今その状況が変わつて、もう一度、都市文化というものを、多様性というようなことが言われるんだけど、それぞれの場所で豊かな都市文化を独自につくるときに、文化であるから、当然、その場所の共有性の問題があるのかということでもみてみると、場所のモダニズムとか、場所で生まれる建築ということが、これからおそらく可能であつて、そのことを見極めるといふ意味で、錦織さんの話は非常に面白かつたというふうに思います。

コーディネーター いろいろと意見をいただきました。

発言B 錦織さん、すごい現代的な話で、3月に「カタストロフィーと建築論」というテーマで、建築学会の建築論委員会でのシンポジウムを拡大でやりますから、ぜひ来てください。そのときに、僕は、広島の前爆の話をしように思つていて、伊藤豊雄さんは、東北大地震のあと、彼が作品を否定することからし始められないといつて逆から逆のパラドキシカルなんで、議論できることが大いにあるですよ。

錦織さん 形しか作つてなかつたというのですね。

発言B そう、そうなんではないかといふことを彼は言つていて、錦織さんが数十年前にリアリティとして感じたことを、伊藤さんはまさに今、現在進行形で考へている。これは実は非常に重要な指摘で、つまり作品主義といふことが、近代の限界なんですね。個人の限界で、個人のアイデンティティといふものを形で記すことが、建築行為であるといふことを、やつぱり何とか乗り越えようとする。ひとつの考へですよ。それはものすごくパラドキシカルなんだけれども、それを建築の意味の問題、つまり建築がこの社会の中でどのように実は成り立っているのかというレベルの問題としては、これから議論したり、それがどのようにちゃんと価値付けを得るかといふことをしなきゃいけないという意味で、すでにもう広島は数十年前に、現代の、その近代の後の社会

が直面している建築の問題に出会つてゐるんですよ。そういう意味でも、広島は建築の場所として、深い、レベルの高い議論が十分に成り立つ。ただ、さつきこれはこれから、石丸先生方と一緒に問題にしていかなきゃいけない、というふうには思つてゐるところです。

錦織さん それは学問的にもぜひお願いしたい。というのは、僕は、広島にも後輩がたくさんいて、地方を支えている建築家、設計者がたくさんいるじゃないですか。その人たちのエネルギーの注ぎどころというものを、うまく作つておく必要があるんです。地方で営々として普通の建物を作つてゐる人たちが町を作つてゐるといふのを、意識化する必要があつて、結局、僕は美しい都市といふのは、誠実に作つた都市だと思つてゐるんですよ。デザインとかどうとかいうよりもね。それから広島に限らないけど、時間をかけて、誠実に作るというエネルギーを、とにかく取り戻して作らなとね、なんかポロポロの町ができてしまう感じがして、学者の先生にもお願いしたいという感じがしてゐるんですね。

まとめとして

コーディネーター だんだん難しい話になつてきたんですけど、私の基本的な考え方としては、河内さんたちの第一世代、それから錦織さんたちの第二世代、そして、私が勝手に言つてゐるんですけど、次の第三、第四世代、そういう人たちが成立してきたのは、やはり第一、第二世代があつて、それに対して自分はどう思うところから、その世代が成立してゐるのではないかと思ひます。そういった人たちがそれぞれの自分たちが持つてゐる役割みたいなものを意識しながら、進んでいけたらいいなといふことと、意見があると思ひますけど、広島が無理をしないでアイデンティティみたいなものを、もつと受け容れるという方向は、間違つてないと思ひます。あまり作品主義とか、そういうことになる、いろいろ問題があるかなとは思ひます。あつても、そういうことをいろいろ議論する場つていうものが、何らかの形で、長期的に、あわててやる必要はないんですけど、時々、顔を合わせながら、少しぐらい徹底的に

議論をしてもいいと思うんですけど、議論するような場を、作っていききたいなというように思っております。

コーディネーター 最後に錦織さんに、まとめと同時に聞き出したのは、原爆があったとき、戦後すぐというのは、やっぱり、東京で活動されておられた非常に優秀な建築者たち、丹下先生とか、それから村野藤吾さんとかと、同時代に仕事ができて、その場所で、どんなことを考えてこられたか、どういう建築論が交わされてきたのか、ということについて、少しお聞きできればと思います。

錦織さん それは、これからの広島が、建築都市として一つの重要な町なんだということです。建築を教育したり、建築を作ったり、建築のことを考えたりするということを、広島では意識的にやっていたと思っています。東京から来た、例えば丹下先生なんかの建築論は戦前に実はもう構築されていた。戦後はそれを実現することだったというふうには、磯崎さんなんかは言われるわけです。昭和一〇年代に、すでに丹下さんは自分の建築論は構築をしていたということ言われていて、僕はそれはそれで、ひとつあるだろうと思います。廃虚のところで、構築されていた建築論が実現するというチャンスに、たまたま彼は巡り会った。だけど実は広島の中で、これからの町や、生活や、日本人が生きているということについての議論がリアリティーを持って論議され実践された現実があると思います。その現実を想いながら、これからもっと、石丸先生も含めて我々も、大きな意味での建築都市としての広島というものを、現在から未来へ向かって作っていかなきやいけない。これは我々の仕事だと思うので、いつかまたそういう議論の場を作っていききたいなと思っています。

コーディネーター テーマはいっぱいあると思うんですね。今日は、私の運営があまりうまくなかったかもしれないけれども、今後また取り組んでいきたいと思っております。本日はお寒い中をお集まりいただきまして、どうもありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします（拍手）。

特に後編に関連した参考文献

- 1 広島県建築士会編 『広島県の建築』〔1〕・1945～1955（広島県建築士会、一九五六年）
- 2 広島県建築士会編 『広島県の建築』〔2〕・1956～1961（広島県建築士会、一九六二年）
- 3 広島県建築士会編 『広島県の建築 第三集』1962～1982（広島県建築士会、一九八三年）
- 4 石丸紀興監修・李明著 『被爆都市ヒロシマの復興を支えた建築家たち』（宮帯出版社、二〇二二年）

脚注

- (1) 前編（「広島市公文書館紀要第26号」）pp.15 参照
- (2) 錦織さんの河内事務所への入所時期は昭和三六年、三七年八月といった記述があるが、ここでは昭和三六年入所説をとる。
- (3) 前編（「広島市公文書館紀要第26号」）pp.27-28 参照
- (4) 前編（「広島市公文書館紀要第26号」）pp.18 表2 参照
- (5) 前編（「広島市公文書館紀要第26号」）pp.30 参照

写真・図版リスト

- 写真1 錦織亮雄氏提供
写真2 錦織亮雄氏提供
写真3 錦織亮雄氏提供
写真4 錦織亮雄氏提供
写真5 錦織亮雄氏提供
写真6 錦織亮雄氏提供・本稿掲載にあたり追加したもの

- 図1 錦織亮雄氏提供
資料1 錦織亮雄氏提供